

# 流通の歴史的変遷から見る三陸サケの社会的機能

所属 国立民族学博物館 外来研究員 氏名 吉村健司

## ショートアブストラクト【要旨】

サケは歴史的に地域社会において文化的に深い関わりを持つなど、日本人に馴染み深い魚である。本稿では、三陸地方におけるサケが有する社会的機能について、「流通」の視点から考察する。サケは、三陸地方では古くから文化的・社会的価値の高い希少な存在であり、近隣から遠方まで様々な地理的スケールの間で、多様な形で利用されてきた。サケの流通は、三陸地方における文化的・社会的機能を構成する重要な要素の一つである

## アブストラクト【本文】

### 1) はじめに

日本人にとってサケは極めて身近な存在であり、お弁当やおにぎりの具材として、多く人の原風景の一部となっている。岩手県は、歴史的にも文化的にもサケと深く結びついてきた地域だが、現在の全国のサケ市場における認知度は必ずしも高いとは言えない。この原因として、歴史的な北洋鮭鱒漁業の発展や人工孵化放流事業による漁獲量の増大に加え、流通技術・コールドチェーンの発達が挙げられる。すなわち、北日本で漁獲された大量のサケが全国的に出回ることにより地域性が薄れたと考えられる。しかしながら、近年のサケ漁獲量の著しい減少により、こうした状況に変化が生じている。本稿では、三陸地方におけるサケが有する社会的機能について考察し、激減するサケと地域社会の関わりについて再考する。

### 2) 江戸時代におけるサケの流通

江戸時代の盛岡藩では、閉伊地方が主なサケの漁場であり、漁業は藩財政の重要な位置を占めていた。サケは他領移出を許された七品目の一つであり、江戸市場との関係によって商品化が進んだ。ここでは、まず南部藩の藩政記録文書である「雑書」を概観し、藩におけるサケの重要性についてまとめた。南部藩ではシーズン最初に漁獲される「初鮭」が重要視され、「時献上」とよばれる各藩に課せられた季節ごとの献上品として江戸幕府へ送られていた。元来、初鮭のような「初物」は、神仏へ献上し、儀礼に用いられる傾向の強いものである。それが神仏を越えて藩や幕府へ献上されることは、サケの強い社会的機能を窺い知ることができる。また、「雑書」に記載された初鮭の採捕地を抽出したところ、沿岸部では馬淵川水系といった藩の北部から、普代川、閉伊川、甲子川と藩の中央部から南部に至る。また、内陸では北上川の藩境部でも採捕されていた記録が残っている（表1）。こうした広範な地域からの献上は領地の安定的な支配の象徴とされた。さらに、初鮭の献上者に破格の褒美が与えられていたことから、初鮭が藩にとって政治的に重要な役割を担っていたことが示唆された。

江戸市場との関係によって南部地域のサケの価値を飛躍させた代表的存在が、保存性の高い塩引（新巻）鮭である。製鉄業が盛んで、燃料となる木材の入手が容易な三陸沿岸部では、古くから製塩が行われ、塩は内陸部との最重要交換資源となっていた。北海道と比較して急峻かつ短い河川の多い三陸沿岸には、最終成熟が進み、身に油分ではなく水分の多いサケが遡上する。塩によって水分を除いたサケは、油焼けすることなく、長期保存に適していた。さらに、新巻鮭は寒風にさらす工程を経る。寒風にさらす際、岩手県以北では氷蔵になり、以南では腐敗するとされており、三陸沿岸を中心とした地域だからこそ、新巻鮭を作り出すことができたと考えられる。すなわち、岩手を代表する資源であるサケと塩が出会い、沿岸部の気候が育んだ新巻鮭は、まさに岩手の自然と文化が生み出した産品と考えられる。これにより、多量のサケを江戸市場に移出することが可能となり、南部藩のサケが一定の評価を得ると同時に、一部の商家に莫大な富を生み出した。一方、有利な江戸への移出が先行したため、整備の遅れた藩内への供給は大きな影響を受けた。また、県内有数の鮭川を有する津軽石では、保存性の高い塩引（新巻）鮭に付着するカビを落としながら、夏まで食べることが出来たという。こうした特性は、夏場の冷害時の救荒食料として重要な役割も果たした。

表 1. 南部藩における初鮭の採捕地

年	日付	見出し	場所	河川	年	日付	見出し	場所	河川
1644	7.17	初鮭	三戸大留	馬淵川	1700	7.15	初鮭献上		
1645	7.14	初鮭	八戸	馬淵川	1701	7.9	初鮭	相坂川	相坂川
1646	7.14	初鮭花巻高瀬留ニテ上ル	花巻高瀬留	北上川	1702	7.26	初鮭	梅内留	馬淵川
1647	6.17	初鮭	五戸・市川	五戸川	1703	7.9	初鮭江戸送	根城川(宮古)	閉伊川
1648	7.19	初鮭	北上川	北上川	1704	8.5	初鮭献上	市川	五戸川
1649	8.1	初鮭	五戸・市川	五戸川	1705	7.11	忌中二付、初鮭不登	関袋留	北上川
1650	8.3	八戸一留ニテ初鮭	八戸一留	馬淵川	1706	7.14	初鮭	関袋留	北上川
1651	7.13	初鮭	三戸梅内留	馬淵川	1707	7.24	初鮭江戸送り	鬼柳町・和賀川	和賀川
1652	7.27	市川ニテ初鮭	五戸・市川	五戸川	1708	7.6	献上初鮭	物見ヶ鼻留	北上川
1653	閏6.29	初鮭	三戸大留	馬淵川	1709	7.27	初鮭	市川	五戸川
1654	7.12	初鮭	八戸馬淵川一留	馬淵川	1711	7.24	献上ノ初鮭	市川	五戸川
1656	7.4	初鮭江戸へ送る	三戸大向留	馬淵川	1712	7.23	初鮭	高瀬留	北上川
1658	7.2	初鮭ヲ江戸へ送ル	三戸大向留	馬淵川	1714	7.3	初鮭献上	北上川	北上川
1661	8.8	初鮭(二番鮭)	八戸馬淵川一留	馬淵川	1715	8.2	初鮭	三十郎留	北上川
1662	5.22	仙徳川ニ初鮭	仙徳川	閉伊川	1716	7.4	初鮭献上	辻ヶ鼻	北上川
1663	7.26	初鮭	八戸馬淵川一留	馬淵川	1718	8.8	初鮭江戸送り	立花	北上川
1665	7.24	初鮭	花巻高瀬留	北上川	1719	7.18	初鮭	梅内留	馬淵川
1667	7.11	初鮭	東浦倉内	北上川	1720	7.22	初鮭献上	立花留	北上川
1668	7.27	初鮭	市川	五戸川	1721	閏7.15	初鮭献上	沖田面	馬淵川
1669	8.5	初鮭	五戸市川	五戸川	1722	7.7	献上初鮭江戸送り	辻ヶ鼻	北上川
1670	7.3	小本川鮭塩引	小本川	小本川	1724	7.20	初鮭献上	相坂村	相坂川
1671	7.25	初鮭	花巻立花留	北上川	1725	7.27	献上ノ初鮭	三戸馬淵川	馬淵川
1672	7.9	初鮭	普代村	普代川	1726	6.24	初鮭	小本村	小本川
1673	7.24	初鮭	立花留	北上川	1727	7.23	初鮭献上	市川	五戸川
1674	8.11	鮭	三戸大向留	馬淵川	1728	8.3	献上ノ初鮭	小本川	小本川
1675	7.5	初鮭塩目悪ク献上セズ	下市川	五戸川	1728	8.14	献上ノ初鮭・二番鮭	黒岩留	北上川
1676	7.19	初鮭	市川村	五戸川	1729	7.23	初鮭江戸送り	梅内留	馬淵川
1677	8.1	初鮭江戸へ登	五戸大坂村	相坂川	1730	7.8	初鮭献上	下市川	五戸川
1678	6.24	初鮭江戸へ登ス	北閉伊根城村	閉伊川	1731	7.10	初鮭	宮古	閉伊川
1679	6.29	初鮭江戸へ登ス	釜石川鱒留	甲子川	1732	7.26	初鮭御献上	立花留	北上川
1680	6.7	季節外レノ鮭献上	千徳村	閉伊川	1733	8.4	献上ノ初鮭	黒岩留	北上川
1682	7.25	初鮭江戸送り	花巻石橋留	北上川	1736	8.8	献上初鮭・二番鮭花巻立花村にて留上	立花	北上川
1683	7.9	初鮭献上	花巻石橋留	北上川	1737	8.7	献上鮭二尺花巻高木村にて取上、登らず	高木村	北上川
1684	6.11	初鮭	三戸梅内	馬淵川	1738	7.15	初鮭一尺献上、花巻高木にて取上登す	高木村	北上川
1685	6.19	初鮭	大槓片岸川	片岸川	1739	8.3	献上初鮭二尺花巻立花にて取上、登らず	立花留	北上川
1687	7.23	鮭	花巻黒岩留	北上川	1740	閏7.14	献上初鮭、三戸道梅内村にて取上、登せ	梅内留	五戸川
1689	6.12	三戸ヨリ初鮭	三戸玉懸留	馬淵川	1741	7.23	献上初鮭、三戸にて取上、登らず	三戸	五戸川
1690	7.12	初鮭	三戸梅内留	馬淵川	1742	8.1	献上初鮭・一番・二番、立花にて取上	立花留	北上川
1691	8.10	初鮭	千徳	閉伊川	1743	7.14	初鮭、五戸市川にて取上、才領付け登す	市川	五戸川
1693	7.22	初鮭江戸へ登ス	五戸市川	五戸川	1744	7.11	初鮭一尺、花巻関袋留にて取上、登らず	関袋留	北上川
1695	7.12	初鮭	二戸玉懸留	馬淵川	1745	8.6	献上初鮭、花巻黒岩留にて取上、登らず	黒岩留	北上川
1696	7.6	初鮭	五戸百石	相坂川	1746	7.13	初鮭一尺、三戸梅内留にて取上、登らず	梅内留	馬淵川
1697	6.28	初鮭	宮古墓目村	閉伊川	1772	8.9	初鮭一尺花巻立花留にて取上、公方様へ献上	立花留	北上川
1698	7.7	初鮭江戸へ送	五戸	五戸川	1786	8.18	献上ノ初鮭、二番・三番迄かの三尺、差登	里分村	北上川
1699	6.23	初鮭江戸送り巻尺、鮭ノ数エ方、ヒトサカ	高瀬留	北上川	1789	7.13	献上ノ初鮭・二番鮭・三番鮭・四番鮭、差登	里分村	北上川

出典：『雑書』より筆者作成

### 3) 定置網台帳から見るサケの流通

申請者は 2020 年に明治期のサケの流通を明らかにすべく、田野畑村民俗資料館に収蔵されていた 1893 年から 1894 年の「有利嶋沖鮭建網壺丁目漁場台帳」を借り受け、

表 2. 魚種別平均単価と漁獲量（1893・1894 年度）

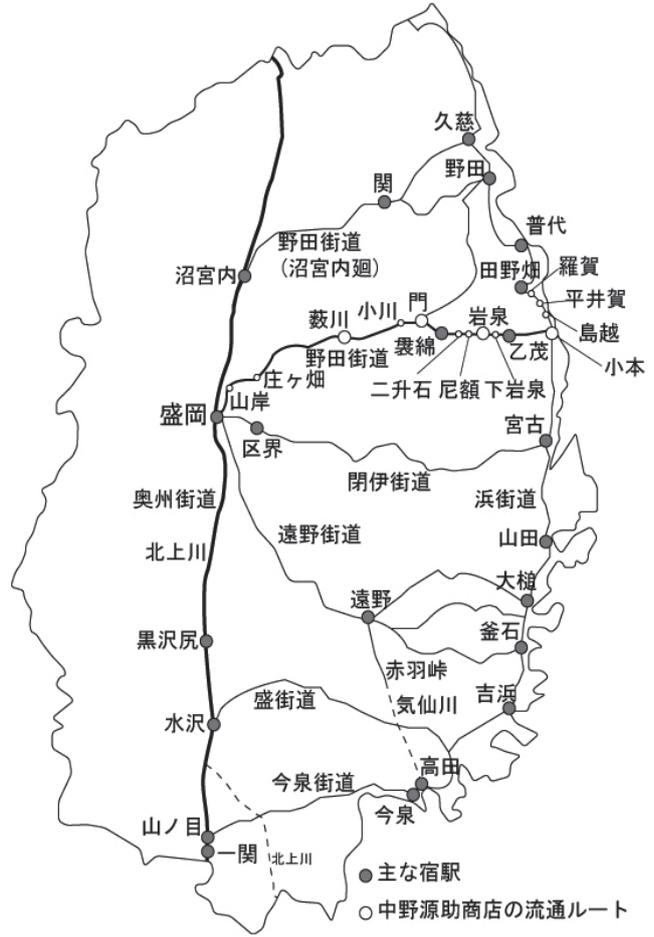
魚種	平均単価*	漁獲量（匹）	漁獲回数	魚種	平均単価*	漁獲量（匹）	漁獲回数
マグロ	7円40銭	63	19	カレイ	5銭	53	8
イシナギ	50銭	1	1	シヨッコ	2銭	18	2
スルメ	25銭	14555	2	フクラ	2銭	8023	13
サケ	22銭	3179	61	ホウボウ	1銭	533	5
ニオブリ	16銭	2	1	タナゴ	9厘	350	1
イナダ	15銭	586	8	アブラメ	—	1	1
ブリ	15銭	10	6	タイ	—	1	1
小ブリ	8銭	1	1	ヒラメ	—	1	1
スズキ	8銭	1	1	タコ	—	—	9
カツオ	5銭	5	1	イワシ	—	—	6

※1匹あたりの値段

出典：「有利嶋沖鮭建網壺丁目漁場台帳」

再整理した。「有利嶋沖鮭建網壺丁目漁場台帳」は島越集落の熊谷家において発見された 1893 年、1894 年の有利嶋沖鮭建網壺丁目の定置網漁場の記録である。当該定置網で漁獲された魚種は 18 種に及ぶ。このうち、漁獲されたものの販売されなかった魚種は、アブラメ（アイナメ）、タイ、ヒラメの 3 種、またタコ、イワシについては販売単位が不明であった。それらを除いた 13 種の販売平均単価を示したものが表 1 である。マグロは 7 円 40 銭と非常に高価な魚種で、別格の扱いを受けていることがわかる。これに次ぐのがイシナギ（50 銭）であるが、漁獲量は 1 尾のみと、滅多に漁獲される魚種ではない。続いてスルメ（25 銭）だが、これも偶発的に大漁を記録するだけで、安定的に漁獲される種とは言い難い。これに次ぐのがサケ（22 銭）である。1893 年度、1894 年度の 2 ケ年度で網を起こした回数はおおむね 84 回で、このうち、サケは 61 回の網起こしで漁獲されている。このことから定置網で安定的かつ高価な位置づけにあることがわかる。

また、漁獲されたサケの多くが村外の商家に流通し、特に隣村の岩泉の商家などへ販売されていた。台帳に多く登場する「中野源助商店（後の岩手魚類株式会社）」へ



の記録を見ると、盛岡を經由し、八戸や函館へ出荷されていた。岩手県北部地域でのサケの漁獲量は南部地域と比べて少なく、希少性が高かったと考えられる。田野畑村の定置網で漁獲されるサケは村内の有力者層での消費に一部貢献していたものの、大部分は県外へ移出され、外貨獲得の重要な資源となっていた。

#### 4) サケの交換を通じた社会関係

岩手県久慈市の久喜集落と小袖集落では、古くから「ケヤグ」と呼ばれる互助的な物々交換関係が形成されていた。今回、聞き取り調査によって、特にサケとマスの交換について調べたところ、久喜にはサケが贈られ、返礼としてマスが贈られることが一般的で、相互の家庭間で贈答関係が固定化されていたことが示唆された。久喜ではサケは高級品であり、滅多に口にすることができなかったが、贈られたサケは保存され、特に「マゴチ」と呼ばれる家内の年長者が優先的に享受することが許されていた。これまで、ケヤグは内陸部から得られる農産品などの生活必需品を得るために行われることが知られていたが、本研究で明らかになった水産物を得るための関係は珍しい。このような交換関係は現在では消滅しているが、家庭間の繋がりは残っており、親交は続いている。久喜では種は限られてはいたものの、水産物の入手がいくらかは可能であった。しかし、それでもサケを小袖から求め、自家消費のみされるところに、地域におけるサケの文化的、食の嗜好性の高さを窺い知ることができる。

人工ふ化放流が全県的に開始される 1980 年代までは、サケは非常に高価な食料で、田野畑村の事例が示す通り他地域に移出させることで、地域の現金獲得資源となっていた。また、大槌町で伝承される「軒先にかかるサケの数でその家の裕福度が分かる」という俗諺も、サケの希少性を示している。

#### 5) おわりに

上記の研究により浮かび上がったサケを希求する様子は、供養碑の供養祭などに代表される儀礼でも確認できる。申請者は、岩手県内において過去に記録があるものも含めて、59 基の水棲動物の供養碑を確認した。このうち、特定の種を対象としたものとしては、サケが 14 基となっており、もっとも多かった。供養碑は単に供養が目的ではなく、次年度以降の豊漁祈願の意も込められている。また、津軽石で実施される初鮭儀礼「又兵衛祭」や「月山・黒崎神社詣」に代表されるような、様々な特色ある地域で受け継がれてきた儀礼も存在する／した。こうしたことから、沿岸地域の人々のサケへの強い意識、渴望する様子が窺える。

サケは様々な地理的スケールを流通し、地域の社会的機能を担ってきた。すなわち、サケは単なる食料源を越えて、地域の象徴的存在、外貨獲得資源、重要なセーフティネットを有する社会的紐帯を取り持つ存在であった。ここで挙げた他にも民俗学的アプローチを通じて、地域とサケの様々な興味深いストーリーを描くことができる。こうしたストーリーから、岩手県におけるサケに対する多様な価値を再発掘し、また付加することで、減少するサケ資源に対して経済的な価値を高めていくことが重要である。